



富山空港は十八日、朝からジェット機就航の祝典ムードに包まれた。富山―東京間の定期便（四往復）の離着陸に加え、地元住民らに乗せた体験搭乗（遊覧飛行）、初の国際チャーター便の出発と、主要空港並みのにぎわいを見せ、終日、活気にあふれた。

県民の夢乗せて ジェットの響き高らか

ターミナル

午前九時二十分、定刻より十五分遅れで東京発の第一便、737型機が着陸した。定期航路に活躍する「ミニ・ジャンボ」の登場だ。続いて727、767型機が降り立ち、三機種が勢ぞろいした。

ターミナルの送迎デッキは、歴史的瞬間をひと目見ようという人で超満員。堤防には約五百メートルにわたり、見物人がぎっしり。「機体の割に音が大きい」「早く乗ってみたい」などと、さまざまなジェット機評。カメラに収める人や双眼鏡でのぞく人など、時折、雪が強く降る中をいつまでも飛行機の姿を追っていた。

ターミナル内では、富山発一便と、海外向けチャーター第一便（香港行き）に乗り込む客でごった返した。東京へ行く高岡市の女性（六三）は「新世紀博の抽選で当たった。こんなに素晴らしい空港から飛べるなんて」と大喜び。海外便の男性（四八）＝立山町＝は「海外第一便と聞いてすぐに申し込んだ。地元から外国へ飛ぶ一。新時代の到来という気がしてならない」と、話していた。

遊覧飛行

開港を記念した遊覧飛行は地元住民ら二百三十五人ずつを乗せて二回、最新鋭のB767型機で能登、新潟、松本上空を約四十分間飛んだ。

二千メートルの滑走路を一気に突っ走り、急上昇。YS11型機の二倍近い速度で、雲間に飛び込んだ。あいにくの天候で、高度を三千メートル前後に落としたが、快適な乗り心地に乗客らは大満足。

富山市根塚、公務員、高柳彰さん（三八）の長男、完君（八つ）は「あっという間に街が小さくなって楽しかった。（機内が広くて）ちっとも怖くない。このまま、アメリカへ行けばいいな」と、最後まで窓をのぞきっ放し。富山市内の主婦（三五）は「安定感があって、気流は気にならない。きょうのように雲の多い北陸の空にはもってこいでは」と、話していた。松原信恭富山地鉄副社長は「ようやく本当の空港になった気がする。767は音も静かだし、あとは客足が増えて定期就航してくれれば・・・」と、期待を込めていた。

ふるさと

富山―東京間に乗務した山村真弓ファースト・スチュワーデス（二六）は上市町出身。五十二年富山高校卒業後、全日空へ入社、八年目の「ベテラン」スチュワーデスだ。「ふるさとに行く一番機に乗れて大変光栄です」と目を輝かせていた。

また、全日空のスチュワーデス一期生だった富山市出身の北野蓉子さん（五〇）＝同社広報室主席部員＝も初便に乗った。北野さんは三十八年の富山空港開港時にスチュワーデスとして乗務した経験感慨深く振り返り「ジェット機が飛ぶようになって、富山県の観光資源が生かせるようになるのでは・・・」と話していた。